

## 聴覚障害児の単語の音節分解および 抽出に関する研究—その 2

斎藤 佐和\*

### I はじめに

同テーマを扱った第1報<sup>1)</sup>では、天野<sup>2)</sup>が行った就学前児童の単語の音節分解・抽出に関する実験を聴覚障害児：5歳児，1年生，2年生に追試し，結果を健聴幼児の結果と比較検討した。それによれば，直短音からなる単語の音節分解では，普通幼児の4歳前半から後半かけて見られる発達の変化は，聴覚障害児（教育的条件に比較的恵まれている者という留保つきで）においては5歳児から1年生後期（7歳代）にかけて緩やかな形で現われることがわかった。また音節抽出では，語頭，語尾音に限って言えば，聴覚障害5歳児の成績は普通幼児4，5歳児の成績より良い傾向を見せていた。

しかしこれらの発達の程度の違いを単に時間的なものと結論するのは早計であろう。例えば聴覚障害児では，音節分解において，普通幼児には殆んど見られない，文字表記に従う分解の型（例えば，きしゃを3単位にわけると多いという特異な反応の型があることも明らかになった。基本的には普通幼児の発達に類似した発達過程を辿ることが確認されるが，1つ1つの行為を仔細に検討していくと普通発達の枠では囲み切れない現象がみられる。言語習得過程において，種々の特殊条件下におかれている聴覚障害児の単語音構造への意識のあり方には多くの未知の部分が残っていると言えるのである。

本研究は，第1報を補足し，この未知の部分を少しでも明らかにしていくため，やはり音節分解・抽出行為に関連するいくつかの実験を行ってその結果を報告するものである。実験は2つに大別される。

実験1は特殊音節に関して顕著にあらわれた聴覚障害児特有の分解の型と文字表記の正確さとの関係について検討しようとするものである\*\*。実験2は聴覚障害5歳児段階での音節分解・抽出行為を再検討するため実施す

\* 現筑波大学学校教育部

\*\* この結果は52年度 日本特殊教育学会で発表した。

\*\*\*この結果は53年度 日本特殊教育学会で発表した。

るものである\*\*\*。それぞれの実験の詳細は以下に述べる。

### II 実験1：特殊音節についての分解の型と文字表記

第1報で報告したように，聴覚障害児の場合，拗音，長音，促音，撥音，拗長音などの日本語の特殊音節についての分解のし方には，個人別にみて次のような3種類のタイプがある。

#### A 音節一拍型

上記の特殊音節に対して一定して音節単位ないし拍単位（短音節を一単位とする）で分解する型

#### B 拍一文字型

通常，拍単位で分解するが，拍と文字数が一致しない時（拗音，拗長音）は文字数にあわせて分解する型

#### C 混乱型

語によって分解のし方が変わり，A，Bいずれの型に属するか断定できない型

この内，A型は普通幼児型とも言えるものである。即ち普通幼児の場合には4歳位を境として，長音節を1単位とする（音節単位）分解から，短音節を1単位とする（拍単位）分解へと移行する傾向が指摘されており<sup>3)</sup>，A型の分解は音声言語習得の過程でごく一般的にみられる型である。

これに対し，B型，即ち文字数と拍数が一致している長音，促音，撥音については拍単位分解をしているように見え，文字数と拍数が一致しない拗音，拗長音の拗音節では文字数に従った分解としている型は，聴覚障害児に特有なタイプである。この型は本質的には文字型と言えるものであろう。

ところで，混乱型もふくめこのような3種類の分解のし方は，実際にこれらの特殊音節を文字表記させた場合，その表記の正しさと何らかの関係を持つものだろうか。実験1はこの点を検討するために実施したものである。

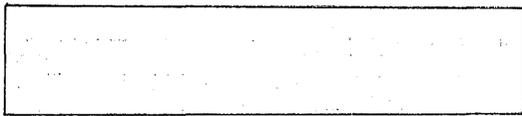
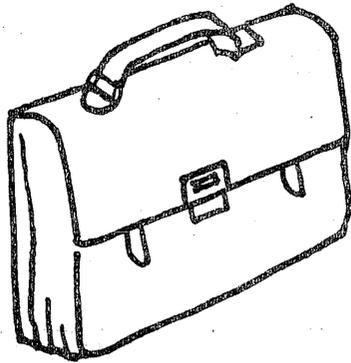


図1 文字表記用絵カード

(1) 方法

天野の原実験<sup>2)</sup>とはほぼ同様の実験装置を用い、天野が使用した下記の特種音節を含む16語について音節分解を行わせ、その後図1にあげたようなカード(絵は分解実験の際に提示したものと同一)を与えて、空欄にそれぞれの語を文字表記するよう指示した。なお16語中モーターボートは特に誤りが多かったので結果の整理から除いた。

使用語

- 拗音を含む語——キシヤ、カボチャ
- 長音を含む語——ゾウ、ヒコウキ、ロウソク(モーターボート)
- 拗長音を含む語——ギウニュウ、チョウチョ
- 促音を含む語——マッチ、ロケット、ラッパ
- 撥音を含む語——トンボ、カバン、ペンギン
- 拗長音と促音を含む語——チュウリップ
- 拗音と撥音を含む語——キンギョ

(2) 被験児

既報で紹介した被験児(計46名)の内、5歳児を除く、1年生21名、2年生18名で、知的、聴覚的な条件は第1報に述べた通りである。

(3) 結果と考察

各学年ごとに分解のタイプによって対象児をA, B, Cのグループにわけ、それぞれのグループについて、正しく文字表記できた語数の平均を出して比較した所、表1のようになった。なお分解の型によるグループわけに

については第1報では各特種音節の種類ごとに各型に属する者の割合を出したが、今回は特種音節全体を通じて一貫して(誤まり1までは許容)音節一拍型ないし文字一拍型で分解しているもののみその型に入るものとした。結果的に第1報に比し、混乱型に入るものの割合が増している。

表1 音節分解の型と文字表記の正しさとの関係

		A音節一拍型	B拍・文字型	C混乱型	検 定 (分散分析)
1年生 計21名	人数	4名	4名	13名	有意 危険率1%
	平均	13.5	13.5	9.8	
2年生 計18名	人数	5名	4名	9名	有意 危険率5%
	平均	14.0	13.3	10.1	

※平均—15語中正しい表記で書かれた語数の平均

この表に示された結果から音節一拍型、ないし拍一文字型による分解を行っているグループでは表記上の誤まりは極くわずかであるのに対し、混乱型では15語中約1/3の語の表記が誤っていることがわかる。3つのグループ間の平均正表記語数の差は分散分析の結果、両学年それぞれについて有意であり、2グループ間の差はAとC、BとCのそれぞれが5%水準で有意であった(ライアンの法による)。従って音節ないし拍によって分解する、すなわち音声言語型の分解をするにしろ、文字数にあわせて分解するにしろ、ある型に固定的に分解するものの方が、どちらの型も混在する子供より正しい文字表記をする傾向にあると言える。逆に見れば、文字表記の正確さ(それを規定する心理的要因は他にも多いが)、文字、構音単位のいずれを手がかりにするにしろ、子供が語中の音節を定位する一定の方法を身につけていることの1つの反映ではないだろうか。この一定の方法の獲得とは、語音の知覚における表象的水準への到達を意味すると言えよう。普通幼児ではこの水準への到達はまず話しことばの発達過程である程度まで実現され、そのころから徐々に進む文字学習によって更に促進補強されると考えられている<sup>2)</sup>。これに比し、聴覚障害児の場合は、我々の得た結果からみて、その表象の成立に文字による視覚的情報が参与している比重は普通幼児よりかなり大きいと思われる。また同時に、感覚=聴覚的言語受容に著しい制限を持つにもかかわらず、普通幼児型の語音表象の発達を見せているもののあることも注目に値する。今後はこれらの音節定位のし方の相違について、その個人的要因あるいは教育的要因を検討し、更に混乱

型を脱却出来ない理由の究明や、それへの教育的対処を考えていく必要が残されているといえよう。

### Ⅲ 実験 2 聴覚障害 5 才児における音節分解と抽出

第 1 報では聴覚障害児の音節分解行為の発達を 5 歳児から 2 年生にかけてみたが、この時の対象児の内、5 歳児の人数(7 名)は充分なものではなく、また 1 クラスの児童に限られていたので、今回に改めて 5 歳児の被験児数を増し、音節分解が出来るようになってくる時期における彼らの音節分解・抽出行為の特徴を更に検討してみることにした。あわせて音節分解行為と動作性機能、運動協応機能、指示文の読みと理解などの対応関係を調べてみたい。この内、特に運動協応機能については、天野<sup>2)</sup>が発達遅滞児において、分解行為の未形成は協応機能の未発達とも関連すると述べている所から、同様の事が聴覚障害児にも該当するかどうか検討しようとするものである。

#### (1) 方法

次に示す一連のテストをいずれも個人テストとして行う。知能テストを除き、他のテストは同一時に続けて行ったが、所用時間は 20~30 分の範囲に納まった。

#### イ 直短音からなる語についての分解テスト

昨年度と同様、天野の原実験<sup>2)</sup>とほぼ同様の実験装置を用い、実験材料も天野が用いた直短音のみの単語(5 語)を利用する。

(i) 練習用——クマ、トラ、ラクダ、メガネ、ヒマワリ

(ii) テスト用——サル、ネズミ、ノコギリ、クジラ、ユキダルマ

#### ロ 同上の語についての抽出テスト

テスト用の 5 語のうち、ノコギリを除く 4 語について積木を使って再度分解させた上で、語頭音、語中音、語尾音に対応する積木をさして音価を問う。(ノコギリを除いたのは、分解テストの結果が特に悪かったため)

#### ハ 知能テスト

WPPSI 知能診断検査の動作性検査を行って、動作性知能指数を出す

#### ニ 運動協応機能についてのテスト

天野<sup>2)</sup>が行った運動協応機能についての 2 つのテストを実施する。

(i) リズムテスト——テープレコーダーから連続的に出される 2/3 秒間隔のパルス音の系列(11 回連続)に協応して、手をリズム的にたたかせる。なお実施に先立ち、音量を調節して確実に聞えていることを確認した

(被験児は全員補聴器を装着している)

(ii) 両手の協応テスト——両手交互開閉テストを実施。

なお両テストとも天野は手の運動の測定をデータレコーダーによって行っているが、本研究では観察によって評価した。

#### ホ 指示文の読みと理解のテスト

被験児は全員既に語や文を読む経験を持っているので、10cm巾のカードに縦にわかち書きした指示文を読ませ、

(i) どのような単位で区切って読むか

(ii) 読みとった指示を理解して実行できるか

の 2 点について評価した。テストに先立ち別の文を用いて練習も行った。

指示文\*\*\*\*

1. てを たたきなさい。
2. うしろを むきなさい。
3. つくえの うえの つみきを ひとつ てにもちなさい。
4. かみに まるを ふたつ かきなさい

#### (2) 被験児

東京教育大学附属(実験当時、現在は筑波大学附属)聾学校幼稚部 2 年(3 学期)在籍の全幼児 17 名。生活年齢からみた内訳は、4 歳 11 ヶ月児を 1 名含む 5 歳前半児が 10 名、5 歳後半児が 7 名である。全員が 3 歳入学以前乳幼児時代から指導をうけてきており、教育的条件には比較的恵まれていると言えよう。平均聴力損失値は 80 dB 台が 2 名いる他はすべて 90dB 以上であり、全員が乳幼児期より補聴している。なお文字の読みについては、全員が既に語や簡単な文を読む程度の経験を持っている。

#### (3) 結果と考察

##### イ 聴覚障害 5 歳児の単語の音節分解

5 歳前半児と 5 歳後半児にわけて、テスト語 5 語に対する平均正反応率を出すと

5 歳前半児 (10 名) 66.0%	} 65.9%
5 歳後半児 (7 名) 65.7%	

となり、月令による差は認められなかった。この正反応率は昨年度の 5 歳児(生活年齢からみると平均 3 ヶ月年長)の結果の 66%とも一致するもので、両年度の結果を総合してみても、教育的条件に比較的恵まれている聴覚障害児の場合、5 歳児ではテスト語の音節分解は概ね 2/3 程度正しく出来、普通幼児でいえば 4 歳前半児の成績

\*\*\*\*これらの文は、国立国語研究所実施の幼児の単語文の読みの理解のテストからとった<sup>(4)</sup>。

表2 語別の分解正反応率

語	正反応率
サル	100.0%
ネズミ	82.4%
ノコギリ	29.4%
クジラ	64.7%
ユキダルマ	52.9%

分散分析の結果単語間の差は  $p < 0.01$  の危険率で有意。

(70%程度——天野<sup>2)</sup>による)に近似する結果だと言うことが出来る。

単語別に結果をみると、表2に示したように差が著しい。このことは普通幼児の場合にも指摘されている<sup>2)</sup>ことで、必ずしも聴覚障害児に特有とは言えない。ただし普通幼児の場合、5歳児ではテスト語についての分解正反応率は殆んど100%であり、単語間の成績変動は主に3歳児、4歳前半児にみられるものなので、その意味では聴覚障害児の反応傾向は年少の普通児に似ていると言えよう。しかしながら、更に聴覚障害児の誤反応を分析してみると、彼らの反応傾向がより年少の普通児と同様とは言い切れないことがわかる。表3に聴覚障害5歳児の誤反応の種類と各々の誤反応全体に対する割合をあげる。

表3 分解誤反応の種類と割合

誤反応の種類	反応例	例数	誤反応中の割合
未分化による誤り	ユ/キ/ダ/ル/マ/ → ユキ/ダル/マ	6	20.7%
過分化による誤り	ク/ジ/ラ → ク/ジ/イ/ラ	3	10.3%
語を知らない		6	20.7%
語をまちがう	ラクダ → イヌ	6	20.7%
発音された音節数自体が不正確	ノコギリ → ノコリと発音しているなど	8	27.6%

普通幼児では誤反応の多くは未分化、過分化によるもので、特に3歳、4歳前半児については誤り全体の65%が未分化によるものであったという<sup>2)</sup>。これに対し表3に示されているように、聴覚障害児では誤反応の2/3強は、語を知らないか、取り違えている(誤って覚えている)か、あるいは語を不正確に認知しそのまま不正確に発音しているか、のいずれかに由来するもので、未分化による誤反応は1/5にすぎなかった。すなわち、聴覚障害児においては、分解がうまく出来ないのは、音節分解

行為の次元というより、語そのものについての正確な知識の次元の方により大きな理由があると言えるようである。ここが普通幼児と異なる点で、聴覚障害児の反応を単により年少の普通児との類似で説明しきれない所である。逆に見れば、意味レベルでの言語習得が確実に進み、また構音要領が体得されその語の発音がより正確になってくれば、音節分解の行為そのものは殆んど正しく出来るだろうことが充分予想できる。従って教育的観点からは、言語習得そのものと構音要領獲得への働きかけを優先させて行けば、それが結果的には音節分解行為にとっても効果がある、と言えるのではなからうか。

ロ 聴覚障害5歳児の単語の音節抽出

ノコギリを除く4語の語頭、語中、語尾音を抽出させた結果は表4のようになった。(ユキダルマの語中音としてはダをとった)

表4 語中の位置別に見た音節抽出・平均正反応率

語	分解正反応率	語頭	語中	語尾
サル	100.0%	94.1	100.0	100.0
ネズミ	82.4	82.4	70.6	82.4
クジラ	64.7	52.9	29.4	47.1
ユキダルマ	52.9	70.6	52.9	94.1
平均	75.0	75.0	51.0	80.9

この結果と昨年度の結果、普通幼児について得られた結果とを比較すると、使用した語は異なるが、語中音の抽出が最も難かしいという傾向は一致している。これに対し、語頭、語尾の難易は語によって異なると言えるようである。昨年度はカタツムリ、コイノボリの2例についての抽出を実施し、語頭抽出の方がより易しいと思われる結果を得たが、今回の場合、ユキダルマでは特に語尾抽出の方がよく出来ている。読話に大きく依存して言語を受容する聴覚障害児にとっては、ユキダルマのように、語頭に読話にくい半母音があり、語尾に逆に読話の比較的容易な両唇音が来ているような単語については、明らかに語尾音の方が認知しやすく、従ってより正しく抽出されるのであろう。天野<sup>2)</sup>は“(抽出が)語頭、語尾、語中の順に困難になるということはあくまでも一般的なことで、具体的には音韻の性質と語の中での位置とが交互作用する”と述べているが、このことは聴覚障害児においても同様にあてはまるものと思われる。あるいは、その特異な言語受容の条件から、このことは健聴児より一層はっきりとあらわれるのかもしれない。これはより多くの語の音節抽出を課すことで確めうることだろう

う。

この他聴覚障害児に特異な結果は、普通幼児では抽出の正反応率が全位置（語頭、中、尾）とも分解のそれより低いのに対し、聴覚障害児では、語頭、語尾の抽出の方が分解の正反応率と同等か、やや高いということである。これは昨年度の結果（5歳～2年生）とも共通しており、かなり一般的な傾向だと言えよう。これは聴覚障害児にとっては、語頭や語尾の認知は出来ても語中の音節数の適確な把握の方が困難な場合のあることを示しており、特にそれが昨年度使用したカタツムリ、コイノボリと、今年のユキダルマについて頻著にあらわれていることから、この現象は音節数が5つ位になると起りやすいのではないかと推察される。このこと、すなわち、単語の音節数と音節分解・抽出の成績との関係は、今後更に組織的検討を要する問題であると言えよう。

ハ 音節分解の成績と知能との関係

WPPSI の動作性検査を行った結果、被験児の動作性知能指数の下限は86、上限は126、平均106、中央値103で、知能段階からみれば全員が中の下から優の中に含まれており、今回の被験児は概ね普通の知能を持つものであったことがわかる。天野は中度精神発達遅滞児において、音節分解行為が困難である1理由として、語の音的側面に注意し音節を抽象する能力の未発達をあげているが、天野の対象児の知能指数が34～54であったことと対比すると、今回の聴覚障害児については同様の意味の抽象能力が未発達なために音節分解が困難であるというケースはないと考えてよいのではなかろうか。事実1語も分解できなかった者は皆無であり、先述したように聴覚障害児の音節分解の成績が悪いのは、主として言語知識の不足、不正確さから来ていると考える方が妥当であると思われる。

ただし、知能指数と音節分解の正反応率との相関は、 $r=0.478$ で、両者の間にはある程度の相関はあると見ることが出来る。

ニ 音節分解行為と運動協応機能との関係

リズムテスト、両手交互開閉テストでは全員が天野<sup>2)</sup>が正反応と評定する反応（各テストにおいて部分的あるいは完全に成功する）を示した。聴覚障害児のリズム機能については組織だった研究はなされていないが、残聴力を活用する早期教育の徹底により、経験的にみて簡単なリズム機能においては大きな遅れは見られないし、また今回のリズムテストの結果もそれを裏づけた。一方両手の協応についても問題となるような反応はみられなかった。従って少なくとも今回の被験児では運動協応機能の

不全が音節分解行為をさまたげる理由にはなっていないと考えられる。

ホ 音節分解の成績と指示文の読みと理解

読み方については、拾い読みではなく全員が文節単位ないし一続きの文としての読み方としており、日常すでにそのような読みの活動が一般化していることがわかった。しかし理解の程度はまちまちで、全文理解できる（2人）から、全然理解できない（5人）までにわたっていた。理解の程度を4グループにわけ、これと音節分解の正反応率との関係を調べた所、表5のようになった。

表5 文の理解と分解の正反応率との関係

文の理解	3～4文理解	2文理解	1文理解	理解せず
人数	4人	3人	5人	5人
分解の正反応率(平均)	75%	73%	64%	56%

分散分析の結果、文理解の程度によって分けられた4グループ間の分解正反応率（平均）の差は有意ではなかったが、何らかの対応関係があると思われる。今後両テストとも問題数を増して再検討することが望ましいだろう。

この結果から、聴覚障害児では文の読みの理解がかなり出来ても単語の音節分解が一般化しないケースがある一方、読みが活動として出来ても音節分解もかなり不完全、意味理解も出来ていないケースのあることがわかる。前者については、やはり言語知識の不足ないし不正確さが主な原因と考えられるが、本来的にこのケースでは文字を読むことが既に意味理解の活動の一貫として機能しており、残った問題はむしろ量的な問題であり、従って教育的対処は比較的容易であると考えられる。これに対し後者は文字を読んでも理解できない所から、天野のいう“機械的連合メカニズム”による文字の読みに近いように思われる。天野<sup>2)</sup>は“分解・抽出行為習得前のかた文字の習得は、機械的連合メカニズムによる学習であって、文字の性格に相応した学習メカニズムに質的に変換される以前のものと考えられる。この場合、文字の習得から、語の読みと理解、語の文字による構成の習得へと発展できると、理論的にも、まったく期待できない”と述べている。我々の被験児は不完全ながら分解・抽出も出来てきているし、文ではなく語の理解であればかなり出来たのではないかとと思われることもあり、天野

のいう機械的連合メカニズムによる文字読みとまったく同一視はできないだろう。しかし文字の学習と音節分解・抽出の形成・発達との相互作用がまだ不十分であることは予想でき、その面での補強がなければいつでも機械的連合メカニズムによる読みに転化する危険があるように思われる。また、このことのみならず前者のグループと同様に、あるいはそれ以上に言語知識も不足していることは当然考えられる。従ってこの後者のグループへの教育的対処としては、音節分解・抽出の行為と密接に関連づけて文字の読みを学習させていくこと、言語知識を拡充させること、この両面からの対応が要請されてくるだろう。

## V まとめ

第1報に引きつづき、聴覚障害児の単語の音節分解・抽出行為にみられる特徴を明らかにしていく目的で2つの実験を行った。その1は、特殊音節を含む語の音節分解の型と文字表記の正しさとの関係を見るものであった。聴覚障害1, 2年生(小学部)についてこの実験を行った結果、特殊音節について、音声言語型の分解をするにしろ、文字数にあわせた分解をするにしろ、どちらかの型に一貫して依拠して分解するものの方が、どちらの型も混在する子供より正しい文字表記をする傾向にあることがわかった。このことから、聴覚障害児は、感覚=聴覚的水準での言語受容に多くの制約を受けながらも、構音単位あるいは文字像を手がかりとして語音の知覚における表象的水準に達していくのではないかと考えられた。ただしこれは特殊音節に限って得られた結果からの推定であり、聴覚障害児の音韻表象の形成過程全体については今後とも様々な角度からのアプローチが試みられ、実体が明らかにされることが望まれる。

第2の実験は5歳児における音節分解・抽出行為の特徴と、音節分解行為と他の能力、機能等との関係を検討するために実施された。

その結果、特に誤反応の分析から、聴覚障害5歳児が音節分解において4歳前半程度程度の成績しか示さないのは、音節分解行為そのものの遅れというより、言語習得全般の遅れから来ると思われる語彙の知識の不足や不正確さ(これには構音上の問題が関与する)に由来する方が大きいのではないかと考えられた。他の諸検査から、

被験児は知能にも運動協応機能にも特に問題のないことが明らかにされたため、分解の不完全さの理由がこれらの面には見いだされず、上記の理由は側面からも裏づけられたと言えよう。ただし分解の正答率と知能とはある程度の相関をもっていることもわかった。

指示文の読みと理解と音節分解の成績を対比してみても、文の読みと理解がかなり出来ても、音節分解が一般化しにくいケースのあること、文を読むことはできるが、音節分解も不十分だし、意味理解も出来ないケースのあることがわかった。それぞれのケースについて適切な教育的対処が望まれる所である。

音節抽出の結果は、第1報で得られた結果を概ね追認するものであったが、新たに、語頭、語尾音の抽出の難易は語によって異なる場合のあることが指摘された。恐らくそれには、普通児以上に音韻の性質そのものが大きく関与するであろうと考えられたが、これについては更に各音韻について組織的に明らかにしていく必要があるだろう。

## 謝 辞

第1報、第2報に述べた実験において、それぞれ被験児となり、貴重な結果資料を提供していただいた筑波大学附属聾学校幼稚部2年生(53年度)、3年生、小学部1, 2年生(52年度)の皆さん、また実験に心よく御協力下さった幼稚部、小学部の担任の先生方、各部の主事の先生方に、この機会を借りて心から感謝の意を表させていただきます。

## 文 献

- 1) 斎藤佐和：聴覚障害児における単語の音節分解および抽出に関する研究，東京教育大学教育学部紀要第24巻，1978
- 2) 天野清：語の音韻構造の分析行為の形成とかな文字の読みの学習，教育心理学研究，18巻2号，1970
- 3) 天野清：中度精神発達遅滞児における語の音節構造の分析行為の形成とかな文字の読みの教授=学習，教育心理研究，25巻2号，1977
- 4) 村石昭三，天野清：幼児の読み書き能力，東京書籍，1972

## Résumé

### Etude sur l'acte d'analyse de la structure syllabique du mot chez les enfants déficients auditifs

—2<sup>e</sup> rapport—

Sawa Saito

La présente étude rapporte les résultats des 2 expériences :

La première expérience étudie, chez les sujets déficients auditifs, la relation entre l'orthographe de par Kana (caractères de nature phonétique) et les manières de décomposition syllabique de mots qui comportent une ou deux syllabes spécifiques (par ex. les sons notant chacun par deux Kana).

sujets : 39 enfants de 1<sup>ère</sup> et 2<sup>e</sup> année de l'école primaire de sourds (A. C. 6 : 11~8 : 2).

résultats : Les sujets qui peuvent décomposer les mots présentés toujours par unité de syllabation ou toujours par unité de lettre (Kana) ont montré meilleurs résultats en ce qui concerne l'orthographe de ces mots que les sujets qui n'ont pas de stratégies cohérentes pour cette décomposition.

La deuxième expérience porte sur les caractéristiques de l'acte de décomposition du mot en syllabes des jeunes enfants déficients auditifs et examine, par ses résultats, la raison du retard du développement de cet acte observé chez eux.

sujets : 17 enfants de la section maternelle de l'école de sourds (A. C. 4 : 11~5 : 9)

résultats : Le pourcentage de décomposition exacte sur les 5 mots présentés est en moyenne 66 % chez les sujets sourds, à peu près même résultats obtenus par les enfants entendants âgés de 4 : 0~4 : 4, ce qui confirme les résultats du premier rapport de cette étude. Par l'analyse des erreurs commises, il nous semble que une des raisons principales de ce retard est plutôt l'insuffisance de la connaissance lexicale que l'insuffisance de l'aptitude à reconnaître les parties (syllabes) appartenant à un tout (mot).